４．電子圧力柱血圧計による血圧測定検証ワーキンググループ

リーダー

研究分担者　大久保孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座　教授）

サブリーダー

研究分担者　岡村智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学　教授）

メンバー

研究協力者　浅山　敬（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座　教授）

前研究班において、令和元年(2019 年)国民健康・栄養調査における電子圧力柱血圧計への変更後の血圧値低下の要因を検証するため、電子圧力柱血圧計による血圧測定検証 WG が創設された。調査を担当した保健所へのアンケート調査を実施し、令和元年(2019 年)調査における血圧低下には、電子圧力柱血圧計・水銀血圧計による測定状況の両者が、いずれも電子圧力柱血圧計測定における減圧速度を速める方向に影響していたこと、および経年劣化した水銀血圧計の使用により過去調査で血圧値が高く表示されていたこと、の両者が関係していた可能性を明らかとした。

この結果等に基づき、事前の取扱い練習徹底等の血圧測定時の留意事項に関するチラシが厚生労働省健康局健康課栄養指導室栄養調査係にて作成され、令和 4 年(2022 年)国民健康・栄養調査実施自治体に配布、留意事項についての周知がなされた。

前研究班では、引き続き、電子圧力柱血圧計を用いた血圧測定が実施された令和元年(2019 年)と、水銀血圧計による血圧測定が実施された直近の平成 30 年(2018 年)の国民健康・栄養調査データの提供を受け、血圧値分布・末尾ゼロ値頻度等についての分析を行った。その結果、平成 30 年(2018 年)に比べ、令和元年(2019 年)の血圧値において、末尾ゼロ値の割合が、特に低い血圧値の部分で高く、令和元年(2019 年)調査における血圧測定精度の低下が示唆された。これより、令和元年(2019 年)調査における血圧値低下には、新規に使用された電子圧力柱血圧計への低い習熟に起因する低い精度の血圧測定が寄与していることが示唆された。

今年度本研究班では、電子圧力柱血圧計を用いた血圧測定に関する事前の取扱い練習のいっそうの徹底、および測定のモニタリングなど、精度を高めるための取り組みの必要性が前研究班で明らかとなったことを踏まえ、令和 6 年(2024 年)調査における血圧測定精度向上のため、厚生労働省健康局健康課栄養指導室栄養調査係担当者に測定方法動画等についての情報提供を行い、トレーニングした上で測定するよう、調査担当者会議等での周知がなされた。

来年度の本研究班ではは、コロナ後の令和 4 年(2022 年)に再開された国民健康・栄養調査における血圧測定データを含む国民健康・栄養調査データの使用申請を行い、血圧値分布・末尾ゼロ値頻度等が令和元年(2019 年)調査とどの程度異なるかについての分析を行いたいと考えている。

今後は、血圧測定に関する注意喚起を追加した令和 5 年(2023 年)、および動画視聴などさらに注意喚起された令和 6 年(2024 年)調査(健康日本 21(第三次)のベースライン)で、血圧値分布・末尾ゼロ値頻度等の推移を検討できればと考えている。

その後、令和 7・8 年(2025・2026 年)の調査で、令和 6 年(2024 年)と同様に動画視聴などさら

に注意喚起を続けていただけるのであれば、それらの血圧値がどう推移するかを、令和 11 年(2029 年)頃にかけて検討し、令和時代の血圧値をどう評価するか、健康日本 21(第三次)評価に向けて、分析していくことが将来的に必要であろう。